楊仁山の日本浄土教批判

――特に『評選択本願念仏集』を中心として――

中村　薫

はじめに

清代末期の居士仏教の代表者である楊仁山（一八三七年～一九一一年）は、金陵刻経処の創始者として著名である。

その彼が、一方で日本浄土教に対して痛烈な批判を加えている。例えば、彼の著である『等不等観雑録』巻六では、

仏教之衰。実由二禅宗一。支那固然。而日本則衰レ於二浄土真宗一。近閲二真宗之書一。与二経意一大相違背。

と述べているが如く、中国の仏教の衰退は実に禅宗により、日本仏教の衰退は浄土真宗によるというのである。そもそも、彼の浄土教に対する主張によれば、清代の浄土教は、禅を批判しながらも日本の浄土真宗をも批判し、結

局聖道門と融和するものであるというのである。その理由は、禅宗も浄土真宗も、ともに世俗の倫理を超越しているという点において批判されるべき共通した性質をもつものであるからである。もとより、楊仁山の浄土真宗に対する理解がどの程度であったか疑問はあるにせよ、博学広識の彼の言葉よりすれば注意を要すべきことに間違いはないであろう。

そこで、小論では、特に『評選択本願念仏集』（以下『評選択集』と略す）に焦点を当てて、楊仁山の日本浄土教批判が奈辺にあるのか検討を加えていくこととする。

一、楊仁山の伝記と著作

そこでしばらく、楊仁山の伝記と著作について紹介していきたいと思う。

彼の伝記については、『楊仁山居士遺著』の第一冊の「楊仁山居士事略」の中に詳しく述べられている。この「事略」は彼の没後、一九五五年に改稿されているが、その巻頭に次の如く述べられてある。

石埭楊居士文会。字仁山。生二於清道光丁酉一八三七年十一月十六日一。

楊仁山（文会）は、清代末期の道光丁酉（一八三七年）十一月十六日、安徽省石埭縣で生まれた。父は樸庵という進士の位を成じていた。幼少の頃から大変聡明穎悟で、十四歳の時、すでに文章の読み書きの能力に優れ、知友と詩を歌ったり、また、射撃刺の術などを習っていた。そして、

居士好レ読二奇書一。常昇二書籠一以レ随。遂博通二音韻暦算天文輿地及黄老荘列之説一。

とあるが如く、音韻・暦算・天文・地理・孔老荘列の学問に通達していた。それは太平天国の乱（一八五一年～一八六四年）などにより、徽贛江浙の間を転々せざるを得なかった激動の十数年のことでもあった。そんな彼が、仏教書と出会うことになったきっかけは、同治二年（一八六三年）の父の死であった。彼は喪中の間、『大乗起信論』を読んでその奥旨を得、以来深く仏教研鑽へと傾斜していったのである。また、彼は、

由レ是遍求二仏経一。久レ之。於二坊間一得二楞厳一。就二几諷誦一。不レ覚二日暮一。

とあるが如く、仏経の捜求を志して、書店で『楞厳経』を読むのに、熱中のあまり日の暮れるのも忘れたという。時に二十七歳であった。

それから、朋友や他省に往く人たちから、いろいろ仏経の存否を尋ね、同治五年（一八六六年）、住居を南京に移し、そこで真定の王梅叔と遇い、また、邵陽の魏剛己を始めとする同志十余人と共に大蔵経の刊刻を発心するのである。そして、

居士則就二金陵職一次擘書刻事。校勘而外。或誦二経念仏一。或静坐作観。往往至二漏尽一

とあるが如く、金陵刻経所を設けて自ら工程をし、ある時は誦経念仏し、またある時は静坐作観して往生浄土の道を求めていったのである。

その後、外務省関係の仕事に従事した楊仁山は、一八七八年に会紀沢に随行して英国・仏国に赴き、そこで彼はすでに中国から流出してしまった古代の仏教書を見る機会を得て、益々刻印教書作成に対する決意を強くすること

となった。時あたかも同じ頃、日本より留学中の南條文雄とロンドンで出会うことになるのである。

「事略」には、次の如く述べられてある。

庚寅（一八九〇年）夏。走二京師一。礼二旃檀仏像一。並蒐集蔵外逸書。適居士丙弟蘇少坡随二使節一東渡。寓書南條文雄広求二逸本一。南條当学二梵文於レ英。居士所二素稔一也。厥後由二日本一陸続得二蔵外著述二百余種一。択レ善付二剞劂一

同治十六年（一八九〇年）の夏より、蔵外の古失した仏典を収集するため、日本の南條文雄に手紙を出して、広く逸本を求めたのである。南條とは英国で梵文を学んでいた頃よりの親友であったことは前述した如くであるが、日本より断え間なく、蔵外の著述二百余種を得、善いものだけを選択して逐次刊行していったのである。

そして、晩年には次のような活動もしている。

戊申（一九〇八年）秋就二刻経処一開二仏学堂一曰二祇洹精舎一冀学者兼通二中西文一以三振二興仏教一。聘二同志教国文英文一。居士則自任二仏学一。就レ学者緇素二十余人。未及両稔。因レ費レ絀而止。

楊仁山は、南京城北延齢巷に家室を建築し、そこを経板の貯存、経典流通の所とした。そして、光緒三十四年（一九〇八年）秋、刻経所に「祇洹精舎」と名づけた仏学堂を開設したのである。学ぶことを希望するものは、英文・国文を兼ねて仏教を学び、その数、僧俗合せて二十余人いた。しかし、二年を経ず、経費の不足を理由に中止せざるを得なかったのである。

また、同「事略」に、

宣統庚戌（一九一〇年）。同人剏立二仏学研究会一。推三居士為二会長一。月会而外。毎週講経一次。聴者多歓喜踊躍。先是日本編印続蔵経。嘗得二居士之賛助一。及成書。多至二万余巻一。極駁雑。居士乃選択若干種。為二大蔵輯要一。擬二一一重刊之一。大蔵続蔵一提要以二示門径一

とあるが如く、宣統二年（一九一〇年）、同人の創した仏教学研究会の会長となり、一週間ごとに仏教の講義をし、聴衆者は大変歓喜踊躍したという。そして、日本続蔵経の編集に対して多くの援助をし、重刊の用意もして刻印に努力したのである。

そんな彼も、宣統三年（一九一一年）秋、病に罹り、金陵刻経処を高弟の陳稚庵・陳宣甫・歐陽泝の三人に嘱し、同八月に往生還帰した。享年七十五歳であった。

中国仏教協会会長趙樸初氏は、

近世仏教昌明。義学振興。居士之功居首

と、楊仁山こそ、近代の仏教を隆昌し、また、教義を学問として振興した第一人者であると敬意を表しているをみる。

次に、『楊仁山居士遺著』所収の彼の著作の目録を列挙しておきたい。

『楊仁山居士遺著』全十一冊

遺像　塔図　金陵刻経処図　塔銘　事略　楊氏分家筆拠……一冊

大宗地玄文本論略註四巻（金剛五位図付）……二冊・三冊
仏教初学課本一巻註一巻
十宗略説一巻……四冊
観無量寿仏経論一巻（願生偈略釈 壇経略釈附）
論語発隠一巻
孟子発隠一巻……五冊
陰符経発隠一巻
道徳経発隠一巻
沖虚経発隠一巻
南華経発隠一巻……六冊
等不等観雑録八巻……七冊・八冊・九冊・十冊
闡教編一巻……十一冊

二、『評選択本願念仏集』

『評選択集』は、『楊仁山居士遺著』の第十一冊の「闡教編」の中に収められている。楊仁山は、『評選択集』で、

因逐一検閲。見レ得二此集一与二経意一不レ合処頗多。略加二評語一。就レ正高レ明。倘不レ以二為然一。請逐款駁詰可也。

と、『選択本願念仏集』（以下『選択集』と略す）は経意と異なっていることが多くあるので、評語を加えて誤まりを問い詰めて訂正すべきであるとして、十四項目について批評を加えている。順次考察していくこととする。

(1) 聖道浄土二門

『選択集』（上）一、二門章に、

道綽禅師、立二聖道・浄土二門一、而捨二聖道一正帰二浄土一之文。

とある。

道綽禅師は、一代仏教を二大別して聖道門と浄土門とに分類し、聖道門は時代の人に適さない教えであるからそれを捨てて、唯ひとり浄土門に帰命すべきであることを明らかにされた。今、法然上人は、この禅師の見解を根本として浄土教の独立存在の意義を提示されたのである。

この浄土宗の「教判」の明示に対し、楊仁山は『評選択集』で、

此一捨字。龍樹道綽皆不レ説。説レ之則有病。蓋聖道与浄土。一而二。二而一者也。

と批評を加えている。

彼は、龍樹・道綽は「捨」ということはどこにも説いていない。その説かれていないことを説くことは病的であ

るというのである。この聖道・浄土を二にして一、一にして二と見ることは、華厳教学でいう「一即多、多即一」の論理に当てはまるものである。故に楊仁山には、浄土教と一般仏教の明確な判別が成されていなかったといえる。

(2) 一生造悪

『選択集』（上）一、二門章に、

当今末法現是五濁悪世、唯有二浄土一門一、可二通入一路。是故大経云。若有二衆生一、縦令一生造レ悪臨二命終時一、十念相続、称二我名字一、若不レ生者、不レ取二正覚一。

とある。この文に対して『評選択集』では、

縦令一生造レ悪。経文中無二此六字一。

と述べている。

これは楊仁山の指摘の通りである。ただ『選択集』では、『大集月蔵経』により、末法の五濁悪世を述べ、『大無量寿経』により、「もし、衆生あって、たとえ一生悪を造るとも、命終のときに臨み、十念相続して、南無阿弥陀仏と称したならば、必ず往生する。もし往生しなかったならば仏とはならない」と述べている。「若不生者不取正覚」の文よりすれば、四十八願の願文であり、内容的には十八願の願文といってよい。しかし、本願文には「縦令一生造悪」の文はないことは楊仁山のいう通りである。じつは、この「縦令一生造悪」の文は、『観無量寿経』の下品下生の、

或有二衆生一、作二不善業五逆十悪一。……略……臨二命終時一……略……具二足十念一称二南無阿弥陀仏一。

の文によっているのである。つまり、禅師が、十八願の十方衆生と、下品下生の人こそ、仏本願の正機であることを理解し、『大無量寿経』の十八願と、『観無量寿経』の下品下生とを結合したのである。このような合糅文は、例えば、『成唯識論』などに顕著にみられる。インドの十大論師（親勝、大弁、徳慧、難陀、安慧、護法、浄凡、勝友、智月、最勝子）の説を合糅して、新たに護法の説を正義として組織されたのが『成唯識論』である。楊仁山は、かかる合糅文が理解できなかったのではなかろうか。

(3) 親　縁

『選択集』（上）二、二行章、二行得失に、

衆生起行、口常称レ仏、仏即開レ之。身常礼二敬仏一、仏即見レ之。心常念レ仏、仏即知レ之。衆生憶二念仏一者、仏亦憶二念衆生一。彼此三業不二相捨離一、故名二親縁一也。

とある。

これは善導大師の『観経疏』の「定善義」の文である。法然上人は、正雑二行の価値批判の標準として「一親疎対、二近遠対、三有間無間対、四不廻向廻向対、五純雑対」の「五番相対」を明かしている。今はこの「親疎対」についてである。つまり、衆生が行を起こして、口称名仏すれば、仏はその念仏を聞く。身をもって常に仏を礼敬すれば、仏はその姿を見る。心でもって仏を念ずれば、仏はその思いを知る。衆生と仏とが互に憶念し合い、それ

ぞれの三業は互に相い離れないため親縁と名づけるというのである。

楊仁山は、『評選択集』で、

　此説レ是比量属二依他性一。

と述べている。

依他性とは、唯識の三性の一つである。ものは他の因縁によって生じるものという意味である。比量とは三量の一つで、我々が一つの事象によって他の事象を正しく推知することである。故に楊仁山は、仏と衆生の親縁の文を、比量・依他起性と理解しているのである。

(4) 疎　行

『選択集』（上）二、二行章、二行得失に、

　衆生口不レ称レ仏、仏即不レ聞レ之。身不二礼レ仏、仏即不レ見レ之。心不レ念レ仏、仏即不レ知レ之。衆生不三憶二念仏一者、仏不三憶二念衆生一。彼此三業、常相捨離。故名二疎行一也。

とある。

これは(3)親縁と反対の文である。疎とは、疏隔の義である。つまり、雑行は阿弥陀仏への行法でないので、口に念仏を称えず、身に礼せず、心に仏を思慕しない状態をいうのである。

楊仁山は、『評選択集』で、

如レ是翻レ対。是世俗見。即是非量。属二遍計性一。以二彼此之界一。揣二度如来一。十万億仏土。如何得レ去。

仏以二無縁大慈一摂二化衆生一。平等普遍。無二親疏之別一。而言二親疏一者属二衆生辺事一。若仏因二衆生一而有二親疏一。則亦衆生而已矣。烏得レ称為レ仏耶。

と述べている。

楊仁山は、この文は全く誤まった知覚と推論による非量であり、妄想された迷いの心の執着するところの偏計所執性であるという。

彼此の世界で如来を推し計ったならば、十万億土はどこにあるというのか。仏は無縁の大慈悲をもって衆生を摂化するのであれば、平等普辺にして親疎の別はない。しかも、親疎というのは衆生の辺事のことであり、もし仏は、衆生を因として親疎があるというならば、則ち衆生のみであり、どうして称名を得て仏と為すというのかと批判するのである。つまり、楊仁山にとって、仏と衆生の彼此三業の不相捨離・常相捨離も共に円成実性とはなり得ないというのである。

(5) 念仏往生の願

『選択集』(上) 三、本願章に、

『無量寿経』上云。「設我得レ仏、十方衆生、至レ心信楽欲レ生二我国一、乃至十念、若不レ生者、不レ

取二正覚一。」

『観念法門』引二上文一云。「若我成仏、十方衆生、願レ生二我国一、称二「我名字一、下至二十声一、乗二我願力一、若不レ生者、不レ取二正覚一。」

『往生礼讃』同引二上文一云。「若我成仏、十方衆生称二「我名号一、下至二十声一、若不レ生者、不取二正覚。」

とある。

これは『大無量寿経』十八願の文である。

十方の衆生が、素直に信じて浄土往生を願い、念仏し続け、それが十念一念で命終するものに至るまで、必ず解脱せしめるであろう。もし正覚できないならば、自分は成仏はしないという誓願である。

『観念法門』では、善導は、称名念仏するのに、上は一生涯のつとめから、下は十声の念仏に至るまで、我が本願力によって必ず救うというのである。

『往生礼讃』でも、同じように、法蔵菩薩は、今現に極楽浄土で阿弥陀仏と顕現されているというのである。故に誰でも称名念仏すれば、必定して往生し、凡夫往生の道を開現したものであるといってよい。

楊仁山は『評選択集』で、

両段引レ文。皆作二下至十声一。可レ見三十念是至二浅之行一。而真宗教旨。反以二此行駕一九品之上。何也。

と述べている。

楊仁山は、この引文はみな下至十声を作すものであり、十念は浅之行に至ると見るべきである。即ち真宗の教旨は、反ってこの九品の上の行を加えるのは何であるかというのである。

(6) 本願文の選択摂取の同異

『選択集』(上) 三、本願章、選択摂取に、

於レ是世自在王仏、即為広説二二百一十億諸仏刹土、天人之善悪、国土之粗妙一、応二其心願一、悉現与レ之。時彼比丘、聞二仏所説一、厳浄国土、皆悉覩見、超二発無上殊勝之願一。其心寂静、志無二所著一、一切世間無二能及者一。具二足五劫一思二惟摂三取荘厳仏国清浄之行一。阿難白レ仏。彼仏国土寿量幾何。仏言。其仏寿命四十二劫。時法蔵比丘、摂二取二百一十億諸仏妙土清浄之行一。……中略……意、亦有二選択義一。謂云三「摂二取二百一十億諸仏妙土清浄之行一」是也。選択与二摂取一、其言雖レ異其意是同。

とある。

これは『大無量寿経』の世自在王仏と法蔵比丘の出会いを通して、阿弥陀如来の本願の興起について説かれた箇所である。

世自在王仏が、二百一十億の諸仏の刹土について説くと、時に法蔵比丘は、諸仏の浄土の因の所説を聞き、自ずから国土人天の善悪を覩見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発したという。そして、更に五劫の間

かけて誓願を思惟して摂取したという。

ここで法然は、『大阿弥陀経』なども引用して阿弥陀の四十二劫の寿命と二百一十億の諸仏の清浄の行を明かし、最後に選択と摂取とは言葉は異なるが真意は同じであるというのである。

楊仁山は『評選択集』で、

摂取専属レ取而不レ言レ捨。選択則有取有捨。語意不同。摂二取二百一十億諸仏妙土清浄之行一。従二上文一思惟摂二取荘厳仏国清浄之行一語来。法蔵比丘当時聞レ説二二百一十億諸仏刹土一。一時融二入心境一。迨二永劫修行之後一。一時発現。非下如二世俗一造作上。須選精美者作二模様一。方能成就也。譬如二春蚕食葉一。大小老嫩。一概食レ尽。及其吐糸変為二一色一。非二復桑葉形様一矣。

と述べている。

摂取についていえば、専ら取に帰属し、捨とはいわない。選択についていえば、取も捨も共に有る。従って言語の意味は同じではないと反論している。

「摂取二百一十億諸仏妙土清浄之行」の前に「思惟摂取荘厳仏国清浄之行」の文がある。これは法蔵比丘が、時に二百十一億の諸仏の刹土が説かれるのを聞いて、一時に心境に融入し、永劫の修行の後、これは世俗のようなものではないことを発現し、また、精美を選ぶということは模様を作すことのはずであり、方に能く成就すべきであるというのである。楊仁山は、譬えば春蚕が葉を食べ、大小老若同じように尽く食べ、糸を吐くに及び、変じて一色となし、またまた桑の葉の形様ではないのではないかという。つまり、摂取と選択とは同義ではないというので

ある。

(7) 弥陀の因果

『選択集』(上)三、本願章、勝劣難易に、

夫約二四十八願一、一往各論二選択摂取之義一者……中略……乃至第十八念仏往生願者、於二彼諸仏土中一、或有下以二布施一為二往生行一之土。……中略……及以孝養父母、奉事師長等種種之行一、各為二往生行一之国土等上。或有下専称二其国仏名一、為二往生行一之土。……中略……如レ是往生行、種種不同。不レ可二具述一也。即今選二捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行一、選二取専称仏号一。故云二選択一也。

とある。

ここでは、念仏往生の願は、布施、持戒、般若、孝養父母などの諸行を選捨して、専ら名号を称することを選取するため、選択というと述べてある。

楊仁山は『評選択集』で、

以二選択取捨之心一。測二度弥陀因地一。弥陀因地。果如レ是乎。

般若為二諸仏母一。般若現時。命根意根俱不二相応一。即証二無生忍一。不但不レ起二浄穢一見一。即仏見法見。亦不レ起也。菩提心為二因果交徹之心一。諸仏極果。名二阿耨多羅三藐三菩提一。此集並二菩提心一而捨レ之。不レ知以レ何為レ仏也。

と述べている。

楊仁山は、選択取捨の心をもって、弥陀因地をおしはかれば、弥陀因地の果はこのようなものであろうかと問うのである。

般若は諸仏を母となし、般若が現ずる時、命根意根倶に相応せず、即ち無生忍を証し、浄穢二見は起きず、即ち仏見法見も起きないのである。

菩提心は因果交徹の心となす。諸仏の極果は、阿耨多羅三藐三菩提と名づく。この『選択集』は並びに菩提心を捨てている。それでは、何をもって仏となすのか知ることができないというのである。

因に、日本の明恵上人も、『摧邪輪』巻上で、

何其悲乎。仍於二或処一講経説法次出二二難一破二彼書一。一揆二去菩提心一過失。（『日本大蔵経』巻四二宗典部・華厳宗章疏下二七五頁）

と、菩提心を否定する法然の『選択集』を批判している。楊仁山も、聖道門を捨て、菩提心を否定するのは仏教ではないと批判しているのである。

(8) 念声是一

『選択集』（上）三、本願章、念声是一に、

念・声是一。何以得レ知、『観経』下品下生云。「令二声不レ絶具二足十念一、称二南無阿弥陀仏一。称二仏

名一故、於二念念中一徐二八十億劫生死之罪一。」今依二此文一、声即是念念則是声、其意明矣。

とある。

ここは『観無量寿経』の下品下生の文により、声即称、称即声である意味を明らかにした箇所である。

善導、法然の浄土教は、『観無量寿経』から『大無量寿経』へ眺め入ることにその教旨があり、『大無量寿経』の十念は即ち『観無量寿経』の称仏であり、本願の称名であることを高調しているといえる。

楊仁山は『評選択集』で、

念者心念也。称者口称也。今云二声即是念。念即是声一。誤矣。観経之文。明明可レ考。経曰。此人苦逼。不レ遑二念仏一。善友告言。汝若不レ能レ念彼仏者。応レ称二無量寿仏一。可レ見二念与称有別一也。下文二具足十念之念一字。是称名之時。一心専精。無二他念一間雑。惟有二称名之念一。十念相続。即得二往生一。此人苦極心猛。命根断時。前後不レ接。金蓮明耀忽然在レ前。心力仏力。皆不思議也。

と述べている。

楊仁山は、念は心念、称は口称、声は即ち念、念は即ち声、というのは誤りではないかという。そして、もっと『経典』の文をはっきりと考えるべきであるというのである。

経文の「この人、苦に逼められて念仏するに遑あらず。善友告げて言わく、汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし、と。」の文をよく見れば念と称とは別であるではないかというのである。

また、十念の念の字を具足するのは、称名の時である。一心専精にして、他の念には雑の間なく、ただ称名の念

あるのみである。十念が相続すれば、即ち往生を得る。この人、苦の極心猛し。命根は時を断じて前後を接しない。金蓮明耀にして忽然と前あり。心力仏力ともに不思議であるというのである。

(9) 一向の言

『選択集』(上) 四、三輩章、廃助傍義に、

上輩之中雖レ説二菩提心等余行一、望二上本願意一、唯在三衆生専称二弥陀名一。而本願中更無二余行一、三輩共依二上本願一故、云二「一向専念無量寿仏」一也。「一向」者、対二二向・三向等一之言也……中略……雖レ説二余行一、後云二一向専念一。明知、廃二諸行一唯用二念仏一故云二一向一。

とある。

上輩の中に菩提心などの余行が説かれてはいるが、阿弥陀仏の本願に照護してみると、ただ衆生をして称名念仏せしめることにあることが理解できる。それは、四十八願中、余行をもって生因本願と願わなかったからである。今、この三輩中、一向専念無量寿仏と説かれたのは、前説の本願の意を受けてのことである。もともとこの一向とは二向三向に対して純粋性を表わす語である。だから一向専念に帰結するため、先ず諸行を廃して余行を説き、そして念仏を説くのを一向といっているのである。

楊仁山は『評選択集』で、

云二一向専念一。明レ知レ廃二諸行一唯用二念仏一。故云二一向一。此段所論一向之言。甚違二経意一。経中所

説菩提心及諸功徳。皆是念仏行門。良以市二一切法一人二一法一。一法摂二一切法一。方見純雑無礙妙用。即得レ名為二一向専念一也。若如レ此中所説為廃二諸行一帰二於念仏一而説者。則経中有二自語相違之過一。何以故。経文明明一聯説レ下。絶無二廃帰之意一也。且著衣喫飯。亦是雑行。便利睡眠。亦是雑行。必須二不食不眠一。一口気念到レ死。方合此集引二証一向之言一也。仏経何等深妙。而以二浅見一測レ之。豈レ不レ貽誤二後人一哉。

と述べている。

楊仁山は、一向を述べるこの段は、まったく経の意に違なること甚しいという。経中では、菩提心も諸の功徳も、みな念仏の行門であるという。それは一切法をもって一法に入り、一法は一切法に摂す。まさに純雑無礙の妙用を見ることにより、一向専念と名づけるのである。

もし、このような所説のように、諸行を廃して念仏に帰すと説くならば、経中に自語相違の過失が有ることになる。どうして経文をはっきりそのように説くことができるのか。まったく廃帰の意はないはずである。かつ衣食飯を著せば、これは雑行である。睡眠も雑行である。すべからく不食不眠、一口気念も死に致るも、まさに合して一向の言を引証するものである。仏経は甚深微妙なのに浅見をもってこれをおしはかることは、後の人を欺くことにはならないかというのが楊仁山の批評である。

(10) 九品行法

『選択集』（下）一一、讃歎念仏章に、

凡九品配当是一往義。五逆廻心通二於上上一、読誦妙行亦通二下下一。十悪軽罪・破戒次罪、各通二上下一、鮮第一義・発菩提心、亦通二上下一。一法各有二九品一、若約レ品即九九八十一品也。

とある。

ここは、機について九品を分けたのであるが、機類万差であるから自ら無量の品があるというのである。しかし、その九品一々にそれぞれの行が配当されているようであるが、じつはそうでなくこの配当は一往の義に当てはめられたものである。だから、その配当は種々変化するのである。五逆罪の人も廻心して上々品に往生することもあり、上々品の読誦の妙行でも、その修行によっては下々品往生の行ともなる。

その意味において、十悪軽罪の人、破戒とそれ以下の罪を犯したものも、各々上下に通じるという。また、解第一義、発菩提心の行者もまた上下に通じ、一法にそれぞれ九品が成立すれば、九九八十一品となり、乃至無量品になるというのである。

楊仁山は、『評選択集』で、

五逆以下三行解説。若約二懺罪猛鈍一。修二証浅深一。則可二以九品互通一。此中説解二第一義一。発二菩提心一。亦通二上下一者。除レ非二中途退堕一。作二諸悪業一。臨二終回心一。如二経文下品中説一。如レ此三行。未レ免レ令二初心人無所適従一。所謂矯乱論議也。

と、五逆以下の三行について解説を加えている。

もし、懺罪猛鈍に約して浅深を修正したならば、九品をもって互通すべきである。この中で、第一義を解して、菩提心を発して上下に通じることは、決して中途退堕に非ざることを除くことである。しかも諸々の悪業を作し、回心して臨終するというのである。それは経文の下品の中に説くが如くであるという。このように三行は、未だ初心の人に身を寄せられることを無さしめ、所謂、論議をいつわり乱れさすものであるというのである。

(11) 法事讃

『選択集』(下) 一四、証誠章に、

善導(法事讃巻下)釈二此文一云。「極楽無為涅槃界、随縁雑善恐難レ生。故使下如来選二要法一、教念二弥陀一専復専上。七日七夜心無間、長時起行倍皆然。臨終聖衆持レ華現。身心踊躍坐二金蓮一。坐二時即得二無生忍一、一念迎将至二仏前一。法侶将レ衣競来著。証二得不退一入二三賢一。

とある。

善導の『法事讃』により述べている。極楽は、煩悩による生滅のない無為の世界であるので雑善雑行も無縁となり生起することはないという。故に釈迦如来は、機に応じて一切行中の肝要な解脱法門を選択して教示された。それは南無阿弥陀仏を念ずることであって、専修の中の一向専修そのものである。七日七夜一心に余行や煩悩などを間雑しないように、一生涯念仏生活の起行が増進されるならば、臨終には聖衆が蓮華をもって来迎するという。そ

の時、身も心も踊躍歓喜に満ちて、金の蓮華台に坐すことができるという。そして、座す時無生忍を得て、一念に来迎引接して阿弥陀仏の御前に至るという。その時、観音・勢至などの真実の友は、競って種々の法衣をもって著せしめられるのである。そうした環境におかれた身が退展することなく三賢位に入るというのである。

楊仁山は『評選択集』で、

善導此頌。重日夜精持。一心無間。下文得二無生忍一。入二三賢位一。皆是証二聖道一也。

と述べている。

善導のこの頌偈の文は、日夜の精神を重ねて、一心専念に念仏して間雑が無いと説いている。無生忍を得て三賢位に入るのは、皆なこれ聖道を証することである。だから、楊仁山は『選択集』の最初で説いた「聖道門を捨てて浄土門に帰す」ということと整合しないのではないかというのである。

(12) 諸仏証誠の唯念仏

『選択集』（下）一五、護念章に、

何故六方諸仏証誠、唯局二念仏一行一乎。

とある。

万行のいずれも尊いのに拘らず、なぜ六方の諸仏は解脱の証言を与えず、唯だ念仏一行に限って解脱を与えているのかと問うているのである。

この点に関して、楊仁山は『評選択集』で、

局字大錯。蓋仏法雖二無量門一。而修習者必従二一門一深二入方一得三遍通二一切仏法一。譬如二一室四面開門一。欲レ人レ室者。必従二一門一。若擬従レ東入。又欲レ従レ西。或兼二南北一。則終無二入室之時一矣。

と述べている。

局の字は大いなる誤りである。たとえ仏法は無量門とはいえ、修習は必ず一門より深入し、方に一切仏法に遍通するを得るのである。譬えば、一室に四つの門扉があるとしても、入室の時は一つの門扉より入るであろう。もし、東より入るように見せて、西より入ろうと欲したり、あるいは南北を兼ねて入ろうとしたら、終に室に入る時をなくしてしまうであろう。だから楊仁山は、局という字は間違いであるというのである。

(13) 選択讃歎

『選択集』(下) 一六、慇懃付属章、八選択に、

選択讃歎者、上三輩中、雖レ挙二菩提心号余行一、釈迦即不三讃二嘆余行一、唯於二念仏一而讃歎、云二「当知一念無上功徳」一(大経巻下意)故云二選択讃歎一也。

とある。

ここでは、三つの選択の第二選択讃歎についての解説をしている。

往生行として広く三輩の中に菩提心、解第一義などの余行を挙げながら、釈迦如来は余行を讃歎せず、唯だ念仏

のみを標榜して一念大利無上功徳を讃歎しているのである。

楊仁山は『評選択集』で、

菩提心即正覚心也。成二正覚一方名レ仏。今重二念仏一而軽二菩提心一。大二違教義一。念仏有二多門一。念仏名号。念仏相好。念仏光明。念仏本願。念仏神力。念仏功徳。念仏智慧。念仏実相。随二念一門一。即摂二一切門一。方入二十玄法界一。若存二取捨之見一。則全是凡夫意想。与二仏界一懸遠矣

と述べている。

楊仁山は、菩提心は正覚心であり、正覚を成ずることは方に仏の名であるといっている。今、念仏を重く、菩提心を軽くすることは、大変に教義と違うというのである。念仏には、念仏名号、念仏相好、念仏光明、念仏本願、念仏神力、念仏功徳、念仏智慧、念仏実相など多門である。念の一門に随って一切の門を摂し、方に十玄法界に入るものである。若し取とか捨の見解が存在するならば、すなわちすべてそれは凡夫の意想であって、仏の世界と遠く懸け離れたものになってしまうであろうというのである。

(14) 西方指南

『選択集』(下) 結勧に、

静以、善導『観経疏』者、是西方指南、行者目足也。

とある。

よくよく心を静めてみれば、善導の『観経疏』は、西方浄土への指南であり、浄土行者にとって人の目や手足のように大切なものであるという。

楊山は、『評選択集』で、

観経所説十六法門。無レ一レ不二是念仏一。此文所判。似レ専局乎持名也。

此集専以二持名一為二念仏一。而観想等法。均判レ在二念仏之外一。非二経意一也。

と述べている。

楊仁山は、『観無量寿経』に説かれている十六の観察法門で、念仏と関係のないものは一つもないという。故にこの文より判断すれば、専局に似たものか、それは阿弥陀仏の名号を受持する持名である。そして、この『選択集』は、専らそうした持名をもって念仏と為すとしている。しかも観想などの法が、同じように判断すれば、念仏の外に存在することになり、経の真意に非ざるものであるというのが楊仁山の批判である。

おわりに

以上、法然上人の『選択集』に対する批判の著『評選択集』を中心として、楊仁山の日本浄土教に対する批判について検討を加えてきたわけである。

楊仁山は、彼の著『等不等観雑録』巻四の中で、

純他力教。一家之私言。非二仏教之公言一也。

と述べている。

楊仁山によれば、純粋他力の教えは浄土真宗の私言であって、決して仏教の公言ではないという。

もともと彼は『等不等観雑録』巻五で、

往往経二浄土一而崇二性理一。鄙人初学レ仏時。亦有二此見一。自閲二弥陀疏鈔一後。始知二浄土深妙一。従前偏見。消滅無余。

と述べているが如く、浄土教を軽く見て、理学を重んじていたが、『阿弥陀経疏鈔』を説んでから、浄土の甚深微妙なことを知り、偏見はとれたという。

しかし、一方では、『等不等観雑録』巻一で、

凡具二信心一発二願往生一者。臨二命終一時、皆仗弥陀接引之力。故能万修万人去也。然往生雖レ仗二他力一。而仍不レ廃二自力一。故以修字勉之。

と述べているが如く、皆な弥陀接引の力により万善万行を修するという。そして、往生は他力によるといいながら、自力は廃していないため修行をおこたってはならないというのである。

そこで彼は、『等不等観雑録』巻四で、

日本伝二仏教一。其有二十四宗一。唯浄土真宗。弘揚最為レ盛。純提二他力教一。全廃二聖道門一。与二支那蓮宗一。判然分二二途一。

と述べているが如く、日本仏教の多くは問題はないにしても、一番盛大である浄土真宗だけは中国の浄土教と異なるという。つまり、中国の浄土教は聖道門を廃してはいないというのである。

そして、具体的に『大無量寿経』の第十八願文の

設我得レ仏、十方衆生、至心信楽、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覚。唯除五逆、誹謗正法。

のうち、「至心信楽欲生我国」の三心を、すべて弥陀の立場により他力廻向と解しているのが浄土真宗だという。それに対して、楊仁山は『闡教編、評真宗教旨』で、

発二此三心一者。仍係自力也。若云下従二他力一生上。他力普遍平等。而衆生有信不信。仗非三各由二自力一而生レ信乎。倘不レ仗二自力一。全仗二他力一。則十方衆生皆応一時同生二西方一。目前何有二四生六道一。流転受苦耶。

と述べている。

もし、絶対他力が容認されたならば、すべての衆生はいつでも成仏可能となるであろう。なのになぜ、四生六道を流転しなければならない衆生が現実にいるのかというのである。故に、楊仁山にとっては半他力、半自力の浄土教は認められるが、絶対他力の浄土教は決して認めることはできないというのである。

一九九四・十二・六　脱稿

追記　本稿作成に当り、石井教道著『選択集全講』（平楽寺書店・昭四十四年刊）に負うところが極めて多かった。

そして『選択集』の解釈をするのに一々の指摘をせずに参考させて頂いたことをお断りしたい。また、荒木見悟著『雲棲袾宏の研究』（大蔵出版・昭六十年刊）も参考させて頂いた。記して謝意を表す。

なお、『選択本願念仏集』は『真宗聖教全書』（一・三経七祖部・九二九頁～九九四頁）によった。『評選択本願念仏集』は『楊仁山居士遺著』（金陵刻本）第十一冊『闡教編・評選択本願念仏集』（十帖右～十六帖左）によった。よって一々の出典箇処は省略した。